御木宏美 HIROMI MIKI

あまえんじゃいたい

illustration 雪舟 薫

「オレが……する、のか……？」
思わず訊いてしまう。
「他に誰がいる。ほら、早くしろよ」
（マジかよ……）

おまえといきたい

《立読み版》

御木　宏美

イラスト　雪舟　薫

初めて触れた唇は、少し熱っぽくてかさついていた。
「リップクリーム使えよ」
囁(ささや)くと、哲也(てつや)は目を開け、骨ばった二本の指で自分の唇に触れた。伏し目がちに、確かめるようにゆっくりと左右に撫でる。
菖(しょう)は互いの吐息が肌にかかるほど間近でその様子を見つめていた。
やがて哲也が目をあげた。
「痛いか？」
真っ黒に日焼けした顔が薄っすらと染まっていた。いつもそうだ。なにか指摘されると、それがどんな些細なことでも恥じる。精悍な外見に似ず、ひどく照れ屋な男だ。
菖は首を横に振った。
哲也が微笑んだ。
「よかった」
「でも、おまえのほうが痛そうじゃん。ここんトコ荒れてるぜ」

白くなってひび割れた箇所に、菖はそっと触れた。
「冬になったらすぐに切れるんだよ。指も」
「ビタミン、足りないんじゃねえの？」
言いながら、哲也がやったように撫でてみる。硬くなった表皮が引っかかる。ぱっくりと口を開けたクレパスから、わずかに血が滲み出た。哲也が顔をしかめる。
「痛い？」
「痛くはねえけど……。血の味、キライなんだよ。なんかガサガサしてて」
「鉄分って、ガサガサって形容するのかよ」
「悪かったなア。どうせオレは作文、苦手だよ。小学校の絵日記は「家族で海に行った。楽しかった」だけで三時間も悩んだよ」
菖は微笑（わら）った。拗ねた哲也はかわいらしい。
「でも、絵は五重マルとったんだろ？」
「おう」
少し機嫌が直った。爽やかで、ちょっと自慢げな笑顔。

「だったらいいじゃないか」
「永瀬？」
いつになくしっとりした菖の態度に、哲也が首を傾げる。
「菖だよ…」
言いながら、菖は首に両腕を回して抱きついた。
「な、永瀬……」
途惑った声。だが、菖は離れなかった。むしろより密接に身体を擦り寄せる。
肩口に顔を埋めると、清潔な匂いがした。哲也が着ているダンガリーシャツからしている。太陽と洗剤の匂い。彼の母親はどこのなんという品を使っているのだろう。哲也からはいつも同じ匂いがする。たぶん香料を加えた合成洗剤だろう。実家で暮らしている彼は、身の回りの世話をすべて母親がやってくれる。菖はその匂いが好きだった。哲也らしいと思う。
わずかな花の香りと陽光が混じった匂いのなかに意識を漂わせていると、上半身に腕のぬくもりを感じた。哲也が躊躇（ためら）いながら抱き締めている。

菖は目を閉じた。
「永瀬……」
耳元で声がする。少し途惑いを含んだ掠れた声。
「なに？」
菖は目蓋をあげずに尋ねた。
「迷惑？」
答えはなかった。けれど、菖には哲也の今の心境が手に取るようにわかった。照れ屋の彼はこういうシチュエーションがなにより苦手だ。シャツを通して感じる肌が熱い。きっと鼓動も早鐘のように打っているだろう。硬い首筋に腕を回したまま、菖はしっとりと微笑った。
「でも、今夜は離さない」
先ほど、初めて交わしたキスの感触が身体全体に蘇（よみがえ）った。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

おまえといきたい

《立読み版》

発行日　２０１１年１０月６日
著者名　御木　宏美
イラスト　雪舟　薫
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Hiromi Miki 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。